

宇野重昭 著

中国共産党 その歴史と実態

日本実業出版社

宇野 重昭 (うの しげあき)

1930年島根県に生れる。53年東京大学教養学科国際関係分科を卒業。59年東京大学国際関係論大学院博士課程終了 社会学博士。61年から64年外務省。現在、成蹊大学教授。

著書に『毛沢東』(清水書院)、『中国共産党史序説(上,下)』(NHKブックス),『太平洋戦争への道』(共著,朝日新聞社)がある。

中国共産党 その歴史と実態 定価 1100円

昭和56年2月20日 初版発行

著 者 宇 野 重 昭

発行者 中 村 進

発行所 株式会社 日本実業出版社

東京都千代田区三崎町3の5の3 ☎ 101

☎代表03 (264) 3781 振替東京 7-25349

大阪市北区西天満6の8の1 ☎ 530

☎代表 06 (362) 6141

印刷所 壮光舎印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

落丁、乱丁本はお取替え致します

© S.Uno 1981

E1600 0022-520653-5915

は じ め に

中国共産党の実態というと、なにか特別のからくりや人脈的なものを暴露した、きわもの的な読みものを思い浮べる人がいるかも知れない。しかし、本書は、そのような種類の本ではない。

もともと中国共産党の指導には、なぞにつつまれた部分が多い。公式に発表された宣言や文書からだけでは、かえってわからなくなってしまうことさえある。なぜ一九五八年に毛沢東は大躍進を發動したのか、どうして一九七一年に林彪が突然没落したのか、どんな背景から華国鋒が指導者のしあがっていったのか、また鄧小平は何度も権力の座から転落しながらどうして復活していったのか、等々、こういったようなことは到底公式文書から知ることができない。もちろんこのような政変劇は、中国以外の他の国々でも見ることはできる。しかし中国のそれはいつそうドラマティックである。

中国政治外交史を専攻する者として、筆者（宇野）も、当然このようなドラマに興味を持っている。とくに一定期間中国共産党史の研究に力を注いだため、公表されている歴史と実際の資料のくい違い、数々の興味深い「極秘資料」、イデオロギー闘争の背景にある人間くさい葛藤にも眼をひかれた。プロレタリア文化大革命のときには、街頭で売られている「紅衛兵新聞」を求め歩き、次に暴露される事実に見合った。

こういったいわゆる地下資料が重要であることは、いうまでもない。「香港情報」や「台湾情報」が、公表された資料より真相に近い例は、枚挙にいとまがないくらいである。これらの非公式文書を無視することは、愚かなことであろう。

しかし非公式文書といってもピンからキリまである。中央の要人が外国人に意識的に洩らす重要談話や地方新聞に載る特殊記事（中国では地方新聞の国外持ち出しは禁止されていた）などは、いずれ公式資料に昇格する可能性が大きい。他方、「紅衛兵新聞」やその一変種としての『毛沢東思想万歳』（『毛沢東選集』とは違う）、あるいは大躍進の挫折期に流出した『中央軍事通訊』などは、今後公式に発表される可能性が、より少ない。また内容的にも、史料考証の必要性がある。さらにいわゆる「香港情報」となると、正しいものもあれば間違っているものもあるし、誇張されたものもあれば作られたものもある。

大切なことは、これらの資料を利用することはあっても、逆にこれらの資料に振り回されないよう注意することである。つまり、なにか特殊な資料を掴んで「これが中国だ」と断定しないことである。中国は複雑である。そして巨大である。地域差も驚くほど大きい。しかも激しく変動する部分と悠々と大河のごとく流れる部分とが、いりまじっている。特殊情報や派閥闘争に興味を持つことも結構である。しかしそれもまた巨大な中国の一部分に過ぎないということも銘記しておくべきであろう。

私は、中国に興味を持つのに、なにもそのような極小部分ばかりに眼を向けることはないと考え

はじめに

I 日本人のための問題提起

——なぜ中国共産党を知らなければならないのか——

1 日中新時代の幕開けといわれるわけは……………14

なにが新時代なのか 14

交流の飛躍的發展 16

それなのにわからない中国 17

2 なぜ中国共産党が十億人を統御するのか……………21

なぜ党なのか 21

賢人政治としての党 22

なかなかない党員 24

中・下級の党員 27

権限の大きい党中央 28

3 思想優先か専門優先かがなぜ問題なのか……………31

「又紅又專」の重要性 31

「紅」とは何か 32

むつかしい専門知識の習得 34

循環する穏歩と急進 36

党の指導の必要性 38

4 日中の真の協調のために何が大切か 42

日本を必要としている中国 42

将来あり得る変化 44

あくまで平等互恵の精神で 45

II 新国家建設への闘い

——中国共産党創設から中華人民共和国建設にいたるまで
知っておきたい七つのポイント——

1 中国共産党誕生の時代的背景は 50

武装せる支配者 50

列強と中国軍閥 51

マルクス主義の導入 52

五・四運動の衝撃 54

最初の組織の芽生え 56

ている。私にとっては、近代中国そのものが、新鮮な驚きであり、つきざる興味の対象である。あのように伝統の古い大国が現在のようにユニークな革命課題と取り組んでいること自体がドラマである。伝統的中國は、他の國に例を見ないぐらい、完備した官僚体制を持ち、強固な封建社會を形成していた。しかし現在では、歐米の最も優れた近代的部分を指向し、變革に向って苦闘している。そこでは古いものと新しいもの、新しいものより新しいものがいりまじり、その表層部分はわきかえっている。しかも基層部分は、ようやく動き出したばかりである。それは、まさに壮大なドラマである。

そのドラマを演出するもの（あるいは演出しようとして試行錯誤をくりかえしているもの）が、中國共產黨である。かれらは、ある意味では、支配者であり、エリートである。ジェイムス・タウゼント『現代中國』は、現在のエリート四千萬人（黨員およびその他の基層幹部）と清朝時代の郷紳層百万人ないし二百万人とを対比している。それは人口に対する比率において、大きく前進している。つまり民主化が進んでいる。しかしエリートはエリートである。

けれども、私は中國共產黨を「エリート」とか「一國の支配者」というより「指導の中核」と表現したい。もともとこの表現を用いたのは毛沢東である。また、この表現をとりだして「プロレタリアートの前衛」としてよりも「民衆の中核」としての中國共產黨を浮きぼりにさせたのが野村浩一『中國革命の思想』（岩波書店）であった。しかし私はもう少し別の意味にこの「中核」という言葉を用いたい。

筆者の見るところ中国共産党は、民衆のなかにあるとともに民衆のなかから突出した集团的英知の結晶としての組織である。それは思いきって大衆化した『賢人政治』の一種である。したがって反対政党的存在というものを前提としていない。野村浩一氏は、むしろ『実』としての民衆に対して『虚』としての幹部を対置しているように思われる。しかし私はエリート・幹部の自己認識がもっと強烈であるように考えている。かれらは民衆から権力を委託されているだけでなく、民衆のよい部分を結集し、代表しているのである。このような考え方は、伝統的中國のそれに酷似している。このことは、反面、常に賢人独裁の危険性をはらんでいる。また権力機構、権力自転の法則などに対して抵抗力が弱くなっている。また官僚とか専門家との関係も微妙である。民衆の眼から見るとき、賢人といっても専門家といっても、どこかに重大な欠陥があるものである。これがどうして互いにあい補うことができるのか、司法・行政・立法のチェック・アンド・バランスとは違い、互いに質の異なるものだけに、その組み合わせ方は大変にむづかしい。

本書はこのような観点から、中国共産党にかんする事実を再整理したものである。用いられている資料は、比較的よく知られているものが多い。しかし筆者としては中国における壮大なドラマが浮きぼりにできるよう、それなりに努力した。本書をあえて「中国共産党——その歴史と実態」と題したゆえんである。

2 中国共産党がめざしたものは何か 58

上海共産主義グループ 58

創立大会をめぐって 60

左翼主義的傾向 62

創立期の苦しみ 64

3 なぜ「第一次国共合作」が推進されたのか 66

むりな合作? 66

理論的な背景 68

マーリンの提案 70

合作の開始 72

合作推進をめぐって 74

4 国共両党の指導権争いはどうなったか 76

深まる国共対立 76

北伐のなかの指導権争い 77

蒋介石の反共クーデター 80

「左傾」路線の自滅 82

5 毛沢東はどうしてリーダーシップを握ったか 85

コミンテルンと毛沢東 85

軍から生みだされる党 86

中央から排除される毛沢東 88

遵義會議の指導権 90

6 「第二次国共合作」の演出者はだれか……………92

むつかしい抗日のための一致 92

モスクワで作られた「八・一宣言」 93

毛沢東のくみかえ 95

抗日のリーダーシップ 97

7 中国共産党はなぜ国民党に勝つことができたか……………99

戦争中の大発展 99

蔣介石の誤算 101

たくみな毛沢東の戦術 103

民衆の動向 104

Ⅲ 路線をめぐる熾烈な闘争

——右に左に揺れる中国の政治を理解する九つのポイント——

1 中華人民共和国創設時の課題は何であったか……………108

困難な近代国家の建設 108

ゆっくりした社会主義化 110

プロレタリア階級の指導権 111

2 中ソ蜜月時代の意味したもののは何か 113

「向ソ一辺倒」への疑問 113

それでも進んだ中ソ友好 114

潜行する亀裂 116

3 なぜ毛沢東は「新しい革命」を発動したか 119

毛沢東の危機意識 119

改良主義批判をめぐって 120

農村における社会主義革命 122

4 鳴放運動や大躍進はどうしておこなわれたのか 124

毛沢東と劉少奇とのくい違い 124

八全大会の意義 125

逆転した鳴放運動 127

大躍進への飛躍 130

大躍進の無理 133

5 どこから革命は大きくゆがんだのか 135

彭德懷問題の大きな意味 135

彭德懷の「意見書」 136

毛沢東の怒り 137

「右翼日和見主義」に対する闘争 139

6

文化大革命はなぜ起ったのか…………… 141

プロ文革評価をめぐって 141

プロ文革の理想と現実 142

劉少奇路線との対決 143

激烈な権力闘争へ 146

文革のはじまり 148

紅衛兵の登場 150

7

なぜ林彪、「四人組」批判が起ってきたのか…………… 152

林彪と「四人組」の関係 152

林彪の失脚 153

クーデターの謎 155

「四人組」の躍進 158

微妙な十全大会のバランス 159

毛沢東の「四人組」への注意 161

「四人組」の反撃 163

「四人組」の行き過ぎ? 165

天安門事件 166

8 華国鋒登場の背景は何か 169

「農業は大寨に学ぶ全国会議」 169

華国鋒の個人的背景 170

第一人者の地位へ 171

華国鋒のバランス感覚 173

9 鄧小平復活が物語るものは 177

鄧小平の背景 177

「専」であれば「紅」? 178

華国鋒の危機 180

方針の転換へ 182

新しい党中央 184

ゆれ動く路線 186

IV 中国をより深く知るために

——現代中国共産党における十の疑問——

1 中国の国家機構はどのようになっているのか 190

2	国政において共産党の占める位置は	194
3	権力交替のルールはどのようになっているか	197
4	どういふ人が出世するのか	200
5	司法権の独立はどうなっているか	202
6	壁新聞はなぜ廃止されたのか	204
7	中国とソ連はなぜ仲が悪いのか	207
8	中国はなぜアメリカとの接近を図るのか	210
9	台湾政策をどのように考えているか	214
10	日本と中国はどこまで手を携えていけるか	216
△付▽	人名事典	220
△付▽	中国共産党関連年表	230

I

日本人のための問題提起

なぜ中国共産党を知らなければならないのか



華国鋒



鄧小平



趙紫陽

1 日中新時代の幕開けといわれるわけは……

なにが新時代なのか

対等な立場で条約締結

一九七二年九月二十九日、日本と中国とはそれまで両国間に存在していた不正常な関係に終止符をうった。それから六年後の七八年八月十二日、日中両国は平和友好条約を結んだ。これは日中関係にとって、まさに画期的な出来事である。

どうしてそんなに画期的なのか。それは日中両国がはじめて対等な立場に立って、友好条約を結んだからである。この「対等」という言葉を強調すると、いささか変に感じる人もあるかも知れない。しかし筆者のようにアヘン戦争以来百四十年間の歴史を専攻している者にとっては、対等な友好条約という言葉に、実に新鮮な喜びを感じる。

よく知られているように、江戸時代までの中国は日本より遙かに優越する立場に立っていた。日本がその仰ぐべき師表を中国人から西洋人に転換したとき、中国の伝統主義者のあいだには日本討伐論さえ起ったぐらいである。

ところが明治維新以来、日中の立場は逆転した。とくに日清戦争以後、日本には反動的に中国蔑

視論が急成長した。あれほど日本に好意的であった孫文でさえ、一九一九年前後から、日本に対する失望の念を深めていった。魯迅のえがく「藤野先生」は（八〇年五月の華国鋒主席の演説のなかでも言及されたが）、ある意味で日中関係のいたましい記録であった。そこには、日本人教師と中国人学生との間の人種を越えたヒューマニズムより、中国人学生に対する日本人学生のさげすみの現実の方が、どぎつい印象を残している。いま生きている日本人の相当部分は、この日中のいたましい、不幸な関係の時代に生をうけたという、のがれることのできない運命をになっている。

しかも日中の不幸な関係は、大戦終結後も終らなかった。朝鮮戦争、そしてアメリカの「中国封じ込め」政策である。この結果、日本と中国とは、一衣帯水の隣国でありながら、遠い遠い国となった。一九五二年、はじめて日中民間貿易がはじまったとき、パスポートの関係から、中国に行くにはビルマ経由とかインド・モスクワ経由などの方法がとられた。もちろん高良とみ、帆足計、宮腰喜助などの人々が貿易協定のため中国に入ったときにも、査証なしという異常さであった。当然中国に対する関心も盛りあがらなかった。昭和二けた代生れの人たちにとって、なんとなく中国よりアメリカに親近感を覚えるようになったのは、この一九五〇年代・六〇年代の異常な日中関係史が、その原因の一つということもできよう。